

一八八六年三月十四日(日)

タクール、聖ラーマクリシュナ、コシポールの別荘で親しい信者たちと共に
信者のために人間として化身された聖ラーマクリシュナ

タクール、聖ラーマクリシュナはコシポールの別荘におられる。日が暮れかかっていた。病気のタクールは、二階の広間に北向きになって坐っていらつしやる。ナレンドラとラカールが二人でお足をさすっている。モニ(校長)はその傍に坐っていた。タクールは手まねで、彼に足をさするようにとおっしゃった。それで、こんどはモニがお足をさすりはじめた。

今日は日曜日。一八八六年三月十四日。チョイトロ月二日。ファルゲン白分九日目。先週の日曜日には、タクールの誕生日によせて、この別荘でお祭りをした。去年の誕生日は南神村(トフキトシヨル)のカーリー神殿で大そうにぎやかに催されたが、今年のご病気のため信者たちは悲しみに沈んでいるので、お祭りといつても名ばかりのものだった。

信者たちはいつも別荘に来ていて、タクールの看病をしている。大聖母(シュリ・シュリ・マー)も看病のため、夜も昼もなく忙しくしておられる。青年信者たちはおおかた、ここに泊まり込んでいる。ナレンドラ、ラカール

ル、ニランジヤン、シャラト、シャシー、バブラーム、ヨーギン、カーリー、ラトゥたちである。

年配の信者たちは殆ど毎日のように来て、ときどき泊まって行き、タクールのご容態を尋ねていた。タラクとシンティのゴパールはずっと泊まっている。若いゴパールも泊まっている。

タクールの病状は、今日も一段と重い。夜更けて白分九日目の月の光を浴びて、庭全体が喜々としているが、タクールの重病を思つて、信者たちの胸は月を見ても一向に明るくならない。まるでみんなは、敵軍に包囲された美しい町に住んでいるような具合だ。どこもかしこも静まりかえつて、ただ春の風で木の葉のすれあう音が聞こえるばかりである。上の広間でタクールは寝ていらつしやる。大そうお苦しそうでお眠りにならぬ。一、二人の信者が黙々として傍に坐っている——何かご用があればすぐ動くつもりで。タクールは時おり、うとうとなさるように見える。

このような眠りがマハーヨーガと言われる状態なのか？「ヤスミン ステイトー ナ ドウフケー ナ グルナーピ ヴィチャーリヤター（『ここに安定すれば、いかなる困難にも動揺せず』——バガヴァッド・ギーター6・22）」これこそ、そのヨーガの状態なのだろうか？

校長はタクールのそばに坐っている。タクールは手真似まねで、もつと近くに寄るようにとおつしやる。タクールの苦しそうな様子を見ると、岩でも溶けてしまふそうだ！校長に向かつて、ゆっくり、ゆっくり、やつとのお話しになった。——「お前たちを泣かせまいと思つて、こんなに苦しんでいるんだよ。——みんなが、『こんなに苦しむなら、体を脱いでしまった方がいい』と言つてくれたら、そしたら脱いじまうんだがねえ！」

この言葉を聞いた信者たちは、胸も裂ける思いだった。彼らの父であり、母であり、護り主である御方がこんなことをおっしゃったのだ！ みんな声も立てられずにいた。ある者は心で考えていた——「これが、クルーシフィックション (Crucifixion: キリストの磔刑^{たがひ}) というものだ！——信者のために肉体を犠牲になさるのだ！」と。

真夜中、タクルルの病状は一層悪化した！ どうかかする方法はないものか？ 知らせの者が一人、カルカッタに向けて送り出された。ウペンドラ^{ドクター}医師とナヴァゴパール^{カワイラジ}医師を伴って、ギリシユがこの真夜中にやってきた。(訳註、カヴィラージ——インドの伝統医学アーユルヴェエダの医者)

信者たちはタクルルの傍に坐っている。少しお楽になつたらしいタクルルは、みんなにこうおっしゃる。

「体の病気は、こりや仕方ないよ。——^{パンチャ・プータ}五元素で出来た体だもの！」(訳註、^{パネア・アト}五元素——^{パシキ}五つの粗大元素^{プー}地、水、火、風、虚空)

ギリシユの方を見ておっしゃった——

「たくさん神様の姿が見えるんだよ！ その中に、この(自分の)姿も見えるんだ！」